

原田直次郎作品の収集

守安 収

5月27日「原田直次郎展」がついに始まりました。館にとってはもちろん、私にとっても念願の展覧会であり、実現したことで少し肩の荷が下りた気がします。何しろ30数年前の開館準備の頃からずっと明治洋画黎明期の松岡寿、原撫松、そしてこの原田直次郎は、市場に出たものすべてを収集し、常設展「岡山の美術」の目玉にしたいと願っていたからです。高望みですが、本気でした。前二者は随分前に特別展を開き、購入や寄贈などによって少しずつコレクションの充実を図ることができました。ところが、直次郎さんは遺作の数が少なくて特別展開催の目途がたたず、館蔵品も開館時の2点のままという状態がしばらく続いたのです。▼とはいえ、真剣に願えば10年に1回くらいはチャンスが訪れるものなのでしょう。本展のB3ポスターに使ったドイツ留学時代の《風景》が3点目、直次郎一家のお宮参りの情景を描いた《上野東照宮》が4点目と、ほぼ10年おきに入手することができました。後者はオークションに出品されたものです。いくら欲しくても県の規則ではオークションで買うことはできません。「これは無理」と諦めていたのですが、落札者に館への寄託を依頼し、さらに時間（「年月」といった方が正しい）をかけて何とか購入した次第。次の10年はもうすぐです。期待しても良いですね。▼それはともかく、見応えのある特別展に仕上がりました。図録も充実しており、執筆者たちの熱意が看取れます。出品者・協力者をはじめ関係各位に感謝します。本展を契機に多くの方々が直次郎さんを知り、次はわが常設展に足を運んでいただきたいものです。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/

交通案内 JR岡山駅東口から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00（入館は16:30まで）
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで（入館は18:30まで）

休館日 月曜日（休日の場合その翌日）／年末年始／展示替え期間中

編集後記

大山真季

美術館ニュース113号をお届けします。明治期に国内外の博覧会で輝かしい成績を取めた陶芸家・宮川香山から、同時代に内国勸業博覧会の審査員を務め、西洋画の普及に尽力した原田直次郎へと展覧会が続きました。原田の父・一道は岩倉使節団に随行しているのですが、岩倉使節団がヴェネチアで支倉常長の文書を発見したことで、250年ぶりに慶長遣欧使節の業績が知られることに。「伊達政宗と仙台藩」展では支倉が日本に持ち帰った遺品である国宝「慶長遣欧使節関係資料」を出品します。異なるジャンルながら共通点を発見し、バトンを繋ぐように続いていく展覧会。次回も繋がる事が出来るでしょうか…？



「美術館の紹介」vol.13

岡山県立美術館は金属の頂部と石積み
の基部に加え、ラスタースタイルで母体を覆った
三層構成である。金属皮膜で塗装されたこの
タイルは、玉虫色のように光や見る角度に
よって色調が微妙に変化する。

原田直次郎とニコラオス・ギジス

橋村 直樹(学芸員)

幕末の江戸に生まれ、明治前半期にドイツのミュンヘンに留学して本格的に西洋絵画を学び、洋画受難の時代に帰国してその普及に尽力しながらも、36歳という若さで夭折した岡山ゆかりの洋画家・原田直次郎の生涯と画業を紹介する特別展「原田直次郎 西洋画は益々奨励すべし」が当館で開催されている。

この展覧会の準備に取り掛るより以前から、原田のミュンヘン留学時代のことが私はずっと気になっていた。というのも、ミュンヘン時代の作品がどれも日本人離れしたもので、帰国後の作品と比して完成度が高く、きわめて魅力的な作品群だと思われたからである。一介の靴職人を古代彫像のようにモニュメンタルに捉えた《靴屋の親爺》や、完璧な明暗表現によって聖職者の横顔を描いた《神父》[図1]、あるいはコッヘル村の木漏



図1. 原田直次郎《神父》1885年 信越放送株式会社

れ日溢れる庭先を描く《風景》といったミュンヘン時代を代表する作品を、原田はいかなる芸術環境の中で、どのような芸術家から影響を受けて制作したのであろうか。このことが以前から気になっていたのであった。

留学時代の原田直次郎については、ミュンヘンでの出会いをきっかけに終生の友となった森鷗外らの日記や回想から、美術アカデミーやガブリエル・フォン・マックスの私塾で西洋絵画を本格的に学びながら、日本人留学生たちと交遊しつつ、ツェツィーリエ・プファフやマリイ・フウベルら現地の女性との恋愛なども経験して、楽しき青春のひと時を過ごしていたことがわかっている。しかしながら、肝心の美術活動については、現存する留学時代の作品群から充実した学びと制作の日々を想像することはできるものの、具体的にはほとんど何もわかっていない。

不明な点の多い留学時代の原田の美術活動について少しでも明らかにしたいと思い、今回の展覧会の準備に入る頃から、当時のミュンヘン画壇や、原田の周辺にいたアカデミーの画家たちについて調べ始めた。そうして原田在籍時のアカデミーの教師陣について整理していく中で、これまで原田との関係の中でほとんど紹介されてこなかった一人のギリシア人画家に注目するに至った*。それがニコラオス・ギジス(1842-1901)である[図2]。

原田留学時代のアカデミーの教師陣の一人だったニコラオス・ギジスは、原田の師として知られるマックスと相弟子で、原田の親友ユリウス・エクステルや原田に恋した女流画家ツェツィーリエの先生の一人でもあった。おそらく故国ギリシア以外ではほとんど知られていないギジスについて、ここで簡単に紹介しよう。ギジスは、1842年、エーゲ海に浮かぶキクラデス諸島の一つティノス島に生まれ、アテネの美術学校に学んだのち、ギリシアと結びつきの深いバイエルンの首都ミュンヘンの美術アカデミーに23歳で留学した。森鷗外の『うたかたの記』の冒頭に「校長ピロッチイが名は、おちこちに鳴りひびきて、独逸の国々はいうもさらなり、新希臘、伊太利、璉馬などよりも、ここに来りつどえる彫工、画工数を知らず」とあるが、まさにギジスは、オスマン・トルコから独立して新生した「新希臘」からミュンヘンにやってきて、高名な「ピロッチイ(カール・フォン・ピロティ)」に学んだ画家であった。アカデミーでの学びを終えてからはミュンヘンの画壇で活躍し、レアリズム的要素の強い風俗画や巧みな陰影表現によ



図2. ニコラオス・ギジス肖像写真 1875年
K. Didaskalou, *Gyzis in Tinos, 100 Years from the Death of the Artist*, Tinos 2001より転載

る人物画[図3]、あるいは聖書や神話に取材した象徴主義的な主題の作品を残した。1882年よりアカデミーの助教、88年からは教授となって教鞭をとり、教え子たちも育てていった。没年の1901年には、ほぼ同時期に亡くなったアルノルト・ベックリン(1827-1901)、ヴィルヘルム・ライプ(1844-1900)とともに遺作展が開催されたほどの画家であった。

ところで私は、このギジスについて、原田との関係から注目するようになるよりだいぶ前から、その名や作品についてはよく知っていた。学生時代、専門とするビザンティン美術研究のためギリシア留学を経験し、アテネのペナキ美術館や国立絵画館でギジスの作品を何度も鑑賞していたため、ニケフォロス・リトラス(1832-1904)やゲオルギオス・ヤコビデス(1853-1932)らとともに19世紀後半にミュンヘンに学んで活躍したミュンヘン派のギリシア人画家の一人としてギジスを認識していたのである。しかしながら、ギジスが原田の留学時代にアカデミーで教鞭をとっていて、原田の師や親友たちと交流のある画家であったことは、この展覧会の準備段階になってはじめて知ったのであった。

そのためこのギジスを、原田と直接的な交流があったことが明らかな画家たちと直接的な交流があり、原田がアカデミーで学び影響を受けた可能性がある画家として、今回の原田展で紹介したいと思い準備を進めてきた。そして展覧会カタログにはギジスの作品画像を掲載し、原田との影響関係を探る小論も執筆した。しかし、結果として、展覧会準備の最終段階になってギジスの作品が借用できないこととなり、展覧会会場において実作品を紹介することができなくなってしまった。

今はまだ残念な気持ちが強いが、いつか日本でギジスの作品を紹介する展覧会を開催できるように、今後も研究を続けていこうと思いを新たにしているところである。



図3. ニコラオス・ギジス《祈るアナトリア人》制作年不詳 個人蔵
N. Μισιρλέ, *Γύζης*, Αθήνα 1995より転載

* その後ようやく昨年になって原田との関係の中でギジスに言及する論考が発表された。安松みゆき「原田直次郎のミュンヒェン」『原田先生記念帖 復刻版』(学藝書院、2015年)所収。

伊達政宗と仙台藩

国宝・慶長遣欧使節関連資料と仙台伊達家ゆかりの名品

福富 幸(主任学芸員)



国宝「慶長遣欧使節関連資料」《支倉常長像》



仙台市指定文化財《紫羅背板地五色水玉模様陣羽織》
作品とともに仙台市博物館蔵

数ある日本史ランキングの中で常に高い人気を誇る戦国時代。想像妄想を大きく広げ、登場人物の魅力的なキャラクター、ドラマチックな生涯や駆け引きが面白く、ゲーム好きの少年から歴女まで老若男女を問わず親しまれ、好きな歴史上の人物は？上司にしたいのは？等など話題に事欠かない。

強いカリスマ性では信長に及ばないだろうが、政宗(1567-1636)も上位にランキングされる人気者である。秀吉より30歳、家康より25歳若かった政宗は、戦乱の世を生き延び、将軍家からの信頼も厚く、諸大名からも一目置かれる存在として仙台藩62万石の礎を築いた。それは政宗が文武に秀でた一流の文化人であったこととも関係するだろう。和歌や連歌、書、茶の湯、能を嗜み、若い頃に華やかな桃山文化に触れた政宗は、壮年、仙台城下を整備するにあたって建築や絵画、工芸の専門家を呼び寄せ東北に豊かな文化をもたらした。

このたび当館では仙台市博物館との交流展を開催し、信長や秀吉、政宗ゆかりの作品や日本の歴史や文化を語るに欠くべからざる名品を紹介する。

《織田信長朱印状》や《徳川家康領知覚書(百万石のお墨付き)》、政宗が秀吉から拝領した具足などは、武将たちの駆け引きの様子を教えてくれる。《菊花図屏風》には政宗自ら流麗な筆で詩歌を書き入れ、教養人としての姿を見ることができる。政宗人気のひとつに、その伊達ぶりがあげられる。政宗所用《黒漆五枚胴具足》の弦月形前立は、政宗のシンボルマークとして定着しているし、《黒羅紗地裾緋羅紗銀モール陣羽織》は素材、意匠ともに当時最新の流行を取り入れている。配色の美しさとポップなデザインが目を引く《紫羅背板地五色水玉模様陣羽織》や家臣たちの旗印など優れた工芸意匠も見どころだ。

戦国時代は西欧諸国にとっては世界の覇権を競い合った大航海時代であり、東の果て日本にもさまざまな西欧の文物や新しい知識がもたらされた。政宗はスペインとの外交を目的に自ら使節を派遣。^{はせくらつねなが}家臣支倉常長は政宗の書状を携え、メキシコ経由でスペイン、ローマへ赴いた。しかしキリシタンへの取り締まりが強化される中、支倉が持ち帰った品々は藩に没収され、記録もほとんど残されなかった。再び陽の目を見たのは約250年後、岩倉具視ら明治の欧米使節がイタリアで支倉の書状を発見したことによる。支倉が残したものは歴史的価値が非常に高く、「慶長遣欧使節関連資料」として平成13(2001)年国宝に指定され、さらにその一部は平成25(2013)年ユネスコ世界記憶遺産にも選ばれた。《支倉常長像》や《ローマ教皇パウロ五世像》など400年前の世界と日本をつなぐ貴重な作品も岡山初公開だ。

岡山の美術展

岡山の作家☆再発見シリーズ

廣瀬 就久(学芸員)

当館では昨年度より、常設展「岡山の美術」の特別展示として、「岡山の作家☆再発見」シリーズを行っています。岡山ゆかりでありながら、広くは知られていない作家や作品について紹介しています。

昨年度は2回展覧会を企画しました。第1回目は宮忠子(1931-)です[図1]。現在の岡山市南区迫川に生まれ、風景や植物を、墨筆で紙に描く作品を、岡山で制作しています。水墨画と同じ画材を用いながら、西洋絵画に見る素描のようでもあり、現代美術の作家としても捉えられる作家です。第2回目は、津山市出身のファッション・イラストレーターで、高い評価を受けながら急逝した森本美由紀(1959-2013)を取り上げました[図2]。アトリエに残された原画や資料を紹介する回顧展です。イラストレーションを紹介する、当館では初めての試みでした。分野が違うためか、今までの展覧会では見られない来館者が、多数いらっしゃいました。

7月15日からは、第3回目の展覧会として、岡崎信吾

(1938-)を取り上げます[図3]。作家は中国東北部の営口市に生まれました。戦後父の故郷である、現在の岡山市東区に引き揚げ、小学校まで過ごします。その後現在の北九州市に移り、同地の高校を卒業しました。上京して東京芸術大学美術学部で油彩画を学び、卒業後に渡欧します。1973年からウィーン美術大学に在籍しました。現在ウィーン在住です。風景画や静物画を多く制作するなか、とりわけ麦畑、麦の穂を描いた作品が評価されています。岡山では発表の機会がなく、日本での紹介も限られていました。

美術館による自主企画の個展は、内外を含めて初めてです。経歴や画業について、作家に面談を行いながら、東京芸術大学の卒業制作から近作までを紹介します。

これからも「岡山の作家☆再発見」は、「瀬本容子展 美しき金地テンペラ画の世界」などに続く予定です。どうぞご期待ください。



【図1】宮忠子《ここは美しい夏の草原》1985年
©Tadako Miya



【図2】森本美由紀の墨画イラスト
©Miyuki Morimoto /森本美由紀 作品保存会



【図3】岡崎信吾《実る麦》1991年 ©Shingo Okazaki

■「岡山の作家☆再発見」シリーズ

I 【終了】「宮忠子展」2015年12月17日(木)-2016年2月7日(日)

II 【終了】「イラストレーター森本美由紀 回顧展」2016年2月10日(水)-3月21日(月・祝振)

III 「岡崎信吾展」2016年7月15日(金)-8月28日(日)

IV 「瀬本容子展 美しき金地テンペラ画の世界」2016年12月16日(金)－2017年1月29日(日)

71年目の夏《POST WAR 66 戦災痕》

石田 すみれ(学芸員)



太田三郎《POST WAR 66 戦災痕 1.田町橋》2011年 本館蔵



この度「岡山の美術展 第2期」(会期：5月31日-7月10日)において、当館所蔵の太田三郎(1950-)作《POST WAR 66 戦災痕》を展示します。

「戦争」というテーマは、太田三郎の重要な題材のひとつです。このテーマの下に、これまでに様々な作品が制作されてきました。そのなかのひとつ、1992年から取り組まれてきた《POST WAR》シリーズは、太平洋戦争に関連する様々な物や人物をモチーフとした作品です。戦没した兵士の顔写真を用いた《POST WAR 46-47 兵士の肖像》からはじまり、今日までに計10シリーズが制作されています。

2011年作の《POST WAR 66 戦災痕》は、1945年6月29日未明、岡山の市街地を襲った岡山空襲の悲惨さを題材とした作品です。岡山空襲で被害を受け、今も市内に現存している建築物がモチーフとされています。2010年、これら戦災遺跡の存在を知った作者は、カメラを手に岡山の街中を訪ねまわりました。焼夷弾の猛威を受けた橋の欄干や焼けた痕跡の残る煉瓦の堀、修復の痕が残る狛犬や、戦後に記念のため保存された鳥居の一部など、20の戦災遺跡が選り出され、作品となりました。

20枚1組で構成された作品の1点1点は、さほど大きなものではなく、約30×15cmの少し黄色みをおびた紙でできています。それぞれに20枚の切手がきっちりと並んだ形につくられ、まるで岡山市内に現存する戦災遺跡が記念切手になったかのようです。本物さながらにミシン目がつけられており、一見切手と見間違ふかもしれません。「作品」であることをうかがえる部分が、作品の最下部に記されたサインとエディションナンバーのみであるところも、切手らしさに拍車をかけているように感じます。切手の形は作者おなじみの様式であり、《POST WAR》シリーズの他の作品でもこの様式がとられています。記念切手のように記録として残り続け、様々な人々に戦争のもたらした悲劇を知ってもらいたいという作者の意図が表現された作品です。

今回の展示では、《POST WAR 66 戦災痕》だけではなく、シリーズ最新作《POST WAR 69 戦争遺児》も出品します。岡山県在住の戦争で父親が戦死、戦病死した方々の協力を得て制作された作品です。全10作の《POST WAR》シリーズのうち、岡山に関連する2つのシリーズ、計40点を一堂に展示します。

また6月25日(土)には、作家を招いての講演会「太田三郎《POST WAR》全10シリーズを語る」も開催します。

展覧会スケジュール

7月
July

5月27日|金|―7月10日|日|

【特別展】

原田直次郎展 西洋画は益々奨励すべし

日本近代洋画の礎を築いた原田直次郎。20歳でミュンヘンに留学した原田は、美術アカデミーで西洋絵画を学び、終生の友情を結ぶことになる森鴎外と出会います。帰国後は、当時の洋画排斥の潮流の中で《騎龍観音》のような優れた作品を精力的に発表しながら、画塾「鍾美館」を開いて後進の育成にも努めました。本展は、原田の作品や資料などに加え、交流関係のあった画家や弟子たちの作品をまとめて紹介する回顧展です。

展覧会期間中、当館学芸員による
ギャラリートークや美術館講座など
随時開催予定。詳しくは当館HPまで。
<http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/>

7月23日|土| 14:00～

記念講演会 「仙台市博物館コレクションの 見所 伊達の美意識」

講師 内山淳一(仙台市博物館 副館長)
会場 2階ホール(先着210名)

8月
August

7月15日|金|―8月28日|日|

【特別展】

伊達政宗と仙台藩

今なお屈指の人気を誇る伊達政宗を初代藩主とする仙台藩。仙台市博物館は、江戸時代を中心とする仙台藩に関する作品や資料、美術工芸品など約9万点を収蔵しています。本展は、遠く離れた岡山と仙台の文化的な相互交流を目的に開催されるもので、平成13年に国宝指定された「慶長遣欧使節」関係資料や《伊達政宗所用具足》と《山形文様陣羽織》重要文化財など同館の名品約120点を展覧します。

8月19日|金| 18:00～

音楽の夕べ 「尺八とフルート演奏」

奏者 尺八：岸本寿男(倉敷市在住)
フルート：佐々木優花(仙台市出身)
会場 中庭 ほか

9月
September

7月15日|金|―8月28日|日|

【岡山の美術展】

岡崎信吾展

9月7日|水|―9月18日|日|

第67回岡山県美術展覧会

9月23日|金|―10月30日|日|

【特別展】文人として生きる

浦上玉堂・春琴・秋琴父子の芸術

日本文人画壇の巨星浦上玉堂は、現在当館が建つ地に生まれ、備中鴨方藩のエリート武士として前半生を過ごしました。50歳で脱藩、安定した生活を捨てて自由を入手し、琴士・詩人・書家・画人として独創的な芸術を開花させます。脱藩に同行した息子2人のうち、春琴は山水や花鳥の名手として人気を集め、秋琴は11歳から会津藩に音楽を以て仕える傍ら画筆を執りました。本展は3人の珠玉の作品群が一望できる貴重な機会です。

9月23日|金|―11月6日|日|

【岡山の美術展】

国吉康雄―日本とアメリカ